

日本イエナプラン教育協会

ニュースレター Vol.1 2010.11月号



発行元: 日本イエナプラン教育協会

編集: 山崎那菜

住所: 〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: Info@japanjenaplan.org

会員のみならず、お待たせしました！日本イエナプラン教育協会のニュースレター第1号です。毎月25日にオランダや日本での実践報告など、様々な情報をお届けしていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

第1回 オープンモデルと 自分の頭で考える(批判的精神)ということ ~~イエナプラン教育の心~~

リヒテルズ直子

2006年に拙著「オランダの個別教育はなぜ成功したのか——イエナプラン教育に学ぶ」を上梓してから4年。今年2010年10月11日に「日本イエナプラン教育協会」が発足しました。オランダの新教育運動組織WVOの書記をしていたスース・フロイデンタールが、かつて、ドイツのイエナ大学で実験校を開いたペーター・ペーターセンの「小さなイエナプラン」を手にしたのは1952年ごろ、彼女が友人のG・ハルテミンクと共に、3000ギルダーを自己出資してワークグループを設置したのは、それから7年後の1959年。そしてフロイデンタールがWVOの総会で初めてイエナプラン教育を全国的に発表したのはさらに5年後の1964年でした。それに比べると、日本でのイエナプラン教育への関心はずっと早く広がっています。短い間に協会設立まで漕ぎつけることができた背景には、私と同じように、この教育理念に深く感銘を受けた人たちが、親として、保育所や幼稚園など小さな子どもたちの発達に携わる者として、小学校や中学校の教員として、また、先生たちを支える研修事業や授業研究に取り組む者として、何かをせずにはおれなくなった、多分、その、体内から突き動かされるような熱い思いがあったからであつたに違いありません。

スース・フロイデンタールが、ドイツのイエナ大学で生まれたペーター・ペーターセン教授のイエナプラン教育を仲間を紹介したあと、ドイツの学校に学校視察に出かけて行ったオランダの人々は、

「なんだ、こんなことなら自分たちの方がきつうまくやれるさ」

と、却って自信を持ったというエピソードをかつて聞いたことがあります。

現に、これまですでに日本からオランダを訪れてイエナプラン校を視察した方からも、

「こんなことなら日本の熱心な先生たちに教えればずっと上手にやると思いますよ」

という声を聞いたことが一度ならずでした。

変革への胎動が社会の中で抑え難いほどに大きくなっている時、古い制度に縛られながらも変革への



クラスでも小グループでもいつも異年齢グループで

エネルギーを体内に感じている人たちは、未来社会への展望を与えるものが見つかれば、たとえそれが小さなアイデアにすぎなくても、それを自分のものにして確実な歩みにつないでいくことができるのでしょうか。かつて、スース・フロイデンタールがオランダにイエナプラン教育を紹介したのは、オランダ社会がそういう変革への胎動の中にあつた時代でした。それは、人々が、産業社会型の学校の中で、子どもたちをあたかも工場の歯車ように育てることに「ノー」と宣言し、一人ひとりが自分らしく、そして、人間らしく育ち、生きていくことのできる社会を求めた時代でした。

ペーターセンの提示した『イエナプラン教育』は、一人ひとりの子どもの個性を尊重し、さらに、一人ひとりの「違い」を前提とした『共生』のあり方を学ぶ場を強く意識しています。

そういう『イエナプラン教育』に感銘を受けたオランダの教育者たちは、徐々に「オープンモデル」という考え方を明らかにしていきました。それは、一人ひとりが、自分自身が生まれ育ってきた環境的な条件のもとで、自分に備わっている個性や経験を通して、自分が立っている場の足元から、そして、自分の頭を使って再度『イエナプラン教育』を自分のものにして実践につなげていくことにほかなりません。

『イエナプラン教育』に感化を受けながら、日本の学校の教室に畳を敷き、机の配置を変えて、日本の土壌に遭ったイエナプラン教育に取り組み始めた岩瀬さん、甲斐崎さん、伊垣さんら日本の小学校の先生たち。この先生方と出会い、そのお話を聞いて、「ああ、オープンモデルを理解してくれていた先生たちがいたんだ」と私は心の中で膝を叩く思いがしました。

オープンモデルは「自分の頭で考える」教育者を求めます。同時に、自分の考えや実践に「独善」的に固執せず、他の人がその人なりにその人の頭と心を使ってイェナプラン教育に取り組む姿勢を尊重します。なぜなら、私たちが目指しているのは、本当に一人ひとりが平等であると同時に、誰一人としても社会から排除することがない、お互いにインクルーシブな態度で互いに互いの存在を尊重し合う、未来の市民社会だからです。そのために、まず変わらなくてはならないのは、古い、産業化社会型の学校教育によって、競争と排除の原理の中で育てられた私たち自身です。私たち大人が変わり、子どもたちを「仲間」として受け入れていくことから、イェナプラン教育は始まります。

スース・フロイデンタールは1964年にこのように言っています。

「イェナプランの概念はそれぞれの状況に適合する形で取り入れなくてはなりません。それぞれの状況に合わせても、大きな原則を見失うことがなければ、安全なコンパスの上で航行することができます」

幸いなことに、その大きな原則は、オランダ・イェナプラン教育の方たちが何年にもわたる議論を重ねて20の原則にまとめてくださっています。20の原則をコンパスにして、変革への熱い思いと、未来はきっとすべての人がその人らしく生きられる社会になるのだ、という確信と希望のもとに、みんなで「日本イェナプラン教育」の旅路を始めましょう。

毎号のニュースレターでは、日本でイェナプラン教育を試みようとしている皆さんに役立ちそうなオランダの記事を原著者のお許しを頂いて翻訳してお届けします。第1回目のシリーズは、オランダで協働ゲームの普及の仕事をしているアナマイケ・ファンハルテンさんが執筆した記事です。アナマイケさんはこの10月に日本を訪れいくつかの保育園でワークショップをし好評を博しました。来年2月ごろにも、シェアリング・ネイチャーの会合に参加するために来日を希望しておられます。うまく都合がつけば日本イェナプラン協会でもワークショップが開催できるかもしれませんね。

の想像力以外にはなにも必要ではないし、手近にあるものだけで十分なのです。子どもたちにとってはすべてのことが遊びであり、遊びを通して子どもたちは学習します。ある年齢になると、ルールが子どもの遊びで一つの役割を果たすようになります。子どもはルールのある遊びを通して、実験的にいろいろなことをやってみて、そのうち、自分でもルールを思いつくようになります。たとえば「この白線の後ろにいないといけないだよ」という風に。こういうルールは子どもたち同士の間で同意を得なくてはなりません。そして、どの子も、また、新しいルールを思いつき他の子どもたちにそれを教えるのです。

翻訳記事シリーズ シリーズ1 協働ゲーム

(アナマイケ・ファンハルテン)

訳:リヒテルズ直子

第1回

原著: Anne Mijke van Harten, *Met elkaar in plaats van tegen elkaar*, Educare nummer 4/03

競い合うのではなく、協力して——協働ゲーム

競争は北アメリカや南アフリカの原住民たちの間では知られざる現象であるとのこと。メキシコでは敵対や競争は違反行為だとみなされてきました。イスラエルのキブツでもベルーの農民たちの間でも協働が奨励されることはあっても競争は一般に避けられるものでした。私たちの今日の社会では、大人は、子どもたちを小さい時からお互いに対立させて遊ばせています。驚いたことに、そういう対立的なゲームや遊び方を、わざわざ子どもたちに与えてそうしているのです。競争的なアプローチにすっかり慣れ親しんでしまっている私たち。そんな中で協働ゲームはもっと別の新しい考え方を提示しようとするものです。

子どもは遊びを通して自分自身を発見します。やってもいいことややってはいけないこととの間の境界線を知ったり、自分にできることを見出したり、自分の周りの世界を遊びながら認知していきます。また、子どもたちは、いとも簡単に、さまざまな遊びを思いつくものです。そういう時、子どもたちには、基本的に自分



遊びは社会性と情緒発達の源

また、子どもたちは、すでにルールのある遊びにも触れるようになります。その例として、家族や友達とする屋内ゲーム、輪になってやるゲーム、数人の子どもたちでグループになってするゲームなどいろいろな形があげられます。こういうゲームはどれもルールがはじめから決まっており、その目的は、たいていの場合、他の子どもに対して自分が勝つことに置かれています。注目すべきなのは、こういう遊びやゲームは大人たちが、子どものために作ったものであることです。もしも私たちが、子どもというものは、まずなによりも、遊びを通してはじめて学習に触れるものだという事を知っていたのなら、いったい、なぜ、私たち大人は、こういう競争的な遊びを通して子どもたち

に学習させようとするのでしょうか。この意味をわたしたちは一度、問い直してみなければなりません。「負けても我慢ができる人になるように(自分たちが優れているとかあまり優れていない、というような、普通あまり気持ちの良いものとは思われない感情を、うまく押し殺すことができるために)―他の子どもの弱点を見つけて自分たちが勝てるように―誰か他の子どもに勝って、その子ども自身が喜びを感じられないのは気分がいいことだから

私たちは何かに属したいと感じている

私たちは皆それぞれ、生まれつき、協働ということ、つまりどこかに属したいとか、誰かと一緒に何かをしたいという欲望を持っているものです。特別に何かの目標を持ってそれを達成したい、ということがなくても、ただ単に、一緒にいるのが心地よいから、ということもあるでしょう。けれども、私たちの社会は、この100年余りの間、個人ということや、一人ひとりを他者から区別するということがばかりを強調してきました。また、競争を通して人と人との間に区別をつけ、誰が一番強いとか、誰が一番頭がいいとか、誰が弱いか、誰が頭が悪いか、、、などということに腐心してきました。こういう私たちの、競争志向の社会の中で、私たちの子どもたちがすでに小さい時から遊びを通してこういう行動を身につけて育っているというのは、単なる偶然にすぎないことなのでしょう。

多くの親たちは、遊びに負けることをとても嫌がる子どもが、どうしたらそういう場面をうまくやり過ごせるようになるのだろうか、と問いかけてきます。親たちの中には、子どもたちが負けることを学ぶことがそんなに必要なことなのかと疑う人もいます。もしかすると、私たち大人もまた、遊ぶ時に一番最後に仲間から選ばれるということがどんなに嫌なものかを今も心のどこかで覚えているからかもしれません。



選んで遊ぶ・協力して遊ぶ

また、たくさんの遊びが、最後には、子どもたちの「そんなの不公平だよ」という言葉や、ゲームボードにコマを投げつけるような行為で終わりにすることがよくあります。一般に競争は破壊的でネガティブな気分をもたらすものです。負けたとか失敗するという可能性はストレスをもたらすもので、子どもたち

を(そして、サッカーの試合などを見てもわかるように大人たちさえも)神経質にし、緊張させるものです。排斥、敵対、緊張というような感情が、多かれ少なかれ起きるものです。それなのに、私たちは、何かしら、競争とは私たちにとって良いものであるという考えに取りつかれています。「負けるということに耐えられる」「自分の順番が来るのを待つ」というようないいわけ、そして、なんと「健全な競争」などという言葉まであるありさまなのです。あらゆる「ネガティブな副作用」やそのために私たちがやらなくてはならない努力、などを考えてみると、競争というものは、果たして、私たちの本当の性質に適合的なものなのかどうか、という疑問が私には湧いてくるのです。いずれにしても、今、私たちが子どもたちに与えている遊びやゲームにはあまりにも選択肢が限られていないのでしょうか。それは、ほとんどの場合、競争の要素を含んだものです。こういう方法では、私たちは、子どもたちの一面の能力しか育てていないのではないのか、と私には思えます。

協働は快適な雰囲気を導くもの

協働ゲームでは一定の目標を達成するためにみんなと一緒に働かなくてはなりません。いつもウインウインの状況が起こります。協働ゲームの一例として、「協働椅子取りゲーム」を挙げることができます。このゲームでは、普通の椅子取りゲームと同じように、音楽が止まるごとに椅子が一つずつ取り除かれていきます。けれども、プレイヤーは皆そのゲームに加わったままです。音楽が止まると、プレイヤーはみんなと一緒に、まだ残っている椅子にみんなで座るように工夫します。そこで、協働することや工夫することが求められるのです。みんなが座ると音楽がまたなり始めます。(だから、時間に追われることもなければストレスもない。)そうしてまた、一つ椅子が取り除かれます。上級プレイヤーのために、足が床についてはいけない、というルールを加えてもかまいません。もちろん、椅子が壊れたり、転んだり、押しつぶされたりしないような安全の配慮しておくことはいうまでもありません。

こういう遊びをやってみるたびに、遊んでいる人たちの雰囲気がとても気持ちの良いものになることに私はいつも気づかされます。子どもたちは楽しそうに一緒になって新しい遊び方を考えるようになります。この遊びでは、みんなと一緒に勝つか、みんなと一緒に負けるか、なのです。挑戦する時も、何かを発見する時も一緒にやります。子どもたちは、オープンになるし、お互いに相談し合います。年齢の異なる子どもたちが一緒に遊べるし、大人と子どもも一緒に遊べます。目標は、一人ひとりが自分だけでベスト・ワンになることから、与えられた目標のために、一緒にその目標を達成することになります。子どもたちが生まれつき持っているポジティブな特性とか行動とかが、協働

ゲームを通して引き出され強化されます。それは、私たちの共生の社会にとってとても大切な特性であるはずで

誰と一緒に遊ぶ？

この記事は私たちが子どもたちに協働することを刺激するような遊びを奨励した時にどんなことが起きるかを示すために書いています。ここにあげた遊びを通して、子どもたちは、自然と一緒に力を合わせようとするようになるし、それによって、自分とほかの子たちがそれぞれ異なる点で優れているということを知り、一緒に何かに成功するということが心地よいものであることを発見します。そして、これをきっかけにして、もっと健全な遊びの喜びを生み出すようになることでしょう。



子どもは遊びの発明家

協働ゲームの利点とは？

- ・信頼や安全の感情をもたらす
- ・楽しくてオープンな雰囲気を生み出す
- ・より高い学習成果や情緒の上での自主性また、自分自身のアイデンティティの健全な発達を生む
- ・協働や相談を刺激する
- ・柔軟的な思考は問題に対する創造的な解決法に向かう態度を生む
- ・競争的なゲームにはつきものの「ネガティブな副作用」がないので、健康上にもよい影響を与える
- ・自分自身の価値や自分自身への信頼を発達させる



★ご報告

日本イエナプラン教育協会設立記念シンポジウム
『イエナプラン教育は、共に生きる未来社会のために』
～明日の学校に向かって～が開催されました

10月11日のシンポジウムでは、会長のリヒテルズ直子氏によるオランダイエナプラン教育に関する講演、また、イエナプラン教育のコンセプトに通じる教育活動を行っている日本の教員(村上忠幸氏【京都教育大学教授】、甲斐崎博史氏、伊垣尚人氏【共に小学校教諭】)による実践報告がありました。

イエナプラン教育を研究し、広めていくための各支部(東京支部・千葉支部・埼玉支部・京都支部・九州支部)も結成され、私たちは、ネットワーク作りや新たな取り組みを行っていく環境を整えるための第一歩を踏み出す事ができました。会場に足を運んで下さった皆様、Ustreamでシンポジウムの様子をご覧になって下さった皆様、本当にありがとうございました。

日本イエナプラン教育協会設立記念シンポジウム動画

前半 <http://www.ustream.tv/recorded/10136173>

後半 <http://www.ustream.tv/recorded/10137142>

★リヒテルズ直子さんへの質問募集

イエナプラン教育やオランダについて、リヒテルズさんに直接たずねてみたいことはありませんか？

みなさまへの回答をニュースレターQ&Aコーナーに毎月掲載いたします。ご質問のある方は、件名に「ニュースレターQ&A」とお書きの上

info@japanjenaplan.org

までメールをお送り下さい。

皆さまのご質問をお待ちしております。



★各支部のご案内

東京支部 info@japanjenaplan.org

京都支部 kyoto@japanjenaplan.org

千葉支部 chiba@japanjenaplan.org

福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org

埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org



★書籍紹介

『オランダの共生教育
学校が〈公共心を育てる〉』

リヒテルズ直子著 平凡社

定価 1,890円

成長から成熟へ、競争から共生への転換期を迎えた日本、成熟市民社会オランダから学ぶものは多い。

「個」を尊重しつつ、人と人との「つながり」や〈公共心〉を追求するオランダの学校の様子を、イエナプラン教育などを中心に報告。